

2024年8月25日

説教題「平和の主はろばに乗って」ゼカリヤ書 9章 9～10節

主任牧師 加藤 誠

「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者／高ぶることなく、ろばに乗って来る。」(ゼカリヤ書9章9節)

卓球の早田ひな選手が、オリンピックから帰国した時の会見で「鹿児島の特攻資料館に行きたい。生きていること、そして自分が卓球をできていることが当たり前じゃないということを感じたいなと思う」と語ったことがさまざまな波紋を呼びました。

わたしはぜひ行ってみたいと思った方です。わたしが鹿児島の「知覧特攻平和会館」を訪ねたのは約20年前のことですが、若い兵士たち一人ひとりの遺品や遺書の前に立ち止まり、いろいろなことを考えさせられた光景が今でもはっきりと心に刻まれています。普段の私たちの会話から79年前の戦争のことがほとんど語られなっている時代に、あの戦争の時代を生きた人びとの記録に触れて、自分を重ね、感じ、自分のこととして考えることは大切なことだと思うからです。そして同時に、早田選手にはあの「特攻」という愚かな死に方を「美化」して若者たちに「強いた」私たちの国はどこで何を間違えたのかを考えることもしてもらいたいと思っています。

先日放映された「～一億特攻への道～隊員四千人人生と死の記録」(NHK)では、アメリカに軍事力で圧倒的に劣っている日本軍が「負け」を覚悟しながらも、一縷の望みをかけて無謀な「特攻」という作戦に突き進み、国民を巻き込んでいった経緯がルポされていました。1941年12月にハワイの真珠湾を奇襲して戦争を始めた日本は、わずか半年後のミッドウェー海戦で敗れて敗勢に追い込まれ、1944年10月フィリピンをめぐる攻防の際に「特攻」作戦を実行に移します。一番最初にその作戦を聞いた兵士たちは「みんな押し黙った」そうです。なぜなら「もうまともに戦えない自分たちの敗勢」を意味する作戦であり、「兵士たちに自決を迫る」作戦だったからです。実際ほとんどの特攻機は敵艦に到達する前に撃ち落とされました。犬死です。敗戦までの10カ月で約四千人の若者が「特攻」で命を落としました。番組では四千人の兵士全員の出身地、出身階層がデータ化されて、全国津々浦々から志願者が「供出」されていた実態が解明されました。村や地区ごとに「志願者数」が割り当てられ、中高生世代の若者が学校長から「志願」を勧められ、「志願者」が出ると村の人々総出で「神鷲」「軍神」とまつりたてて送り出しました。署名された日の丸や教師たちが激励の言葉を寄せた和紙の束が手渡されて、若い命が差し出されていったのです。このような「特攻」はほんとうに「美しいこと」なのでしょうか。戦後、生徒たちを「志願」させた校長は教師を辞めて農業に転じられたそうです。「先生」と呼ばれ続けることに耐えかねたのだと思う…と息子さんは述懐されていました。その元校長先生の姿に、

自らの過ちと誠実に向かい合おうとする姿を見ます。「自虐的」と言う人がいますが、私たちの国がどこでどう間違えたのか。国中の人たちがどんな愚かさに陥っていったのかを、歴史資料で確認し、見つめ、自分の身をそこにおいて考えることは「二度と同じ過ちを繰り返さない」ために大切なことです。

「わたしは神が平和を宣言なさるのを聞きます。主は平和を宣言されます／御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に／彼らが愚かなふるまいに戻らないように」（詩編 85・9）。ユダヤの人たちは、自分たちが神の前に犯した「愚かさ」を何百年にもわたって語り継ぎ続けました。人間は「同じ愚かさ」を何度でも繰り返すものだからです。聖書がなぜこんなに分厚いのか。それは私たち人間が性懲りもなく同じ過ちを昔の昔から繰り返し続けているからです。

その私たちを「真の平和」に導く「平和の主」は「ろばに乗って来る」とゼカリヤは預言しました（ゼカリヤ書 9・9）。そして主イエスはこのゼカリヤの預言どおりにろばにの子に乗ってエルサレムの都に入られました。なぜ「ろば」なのでしょう。当時、王が都に凱旋して入城するときには軍馬に颯爽とまたがりました。昭和天皇も白馬に乗って日本軍の兵士たちを鼓舞しました。体格が良く美しい軍馬こそ、王たるものの風格にふさわしいものです。それに対して「ろば」は馬に比べて足が圧倒的に遅く小さいので戦争に向きません。庶民の暮らしの中で黙々と荷物を運ぶのが「ろば」の役目です。なぜ「平和の主はろばに乗って来る」のか。私たちをほんとうの平和に導く方は、戦いで敵を打ち殺し、相手をねじふせ屈服させる王ではない。神が遣わされる「平和の主」は、人びとの間で黙々と重荷を背負い、人びとの暮らしを支え、その命を支える方だということでしょう。主イエスは力づくで逮捕しにきた兵士に向かって剣を振り上げた弟子に「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言われました（マタイ 26：52）。これは人類の歴史から私たちが学ぶ確かな教訓です。どんなに正義を手にしていても、力づくで、剣でそれを実現させるなら失敗します。剣では平和はつくれないからです。主イエスは剣に対して丸腰で向かい合われました。それどころか十字架の上で「父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは自分が何をしているのかわからないのです」（ルカ 23：34）と祈られました。クリスチャンを力づくで迫害していたパウロは、この十字架の主の祈りと出会って自らの過ちを示され百八十度変えられました。「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ 12:19、21）。「怒りを祈りに」変えて神に従う。「ろば」に乗ってこられた「平和の主」、主イエスがその十字架を通して私たちに教えてくださっていることです。私たちの国がどこで何をどう間違え、悲劇を生み出したのか。歴史をしっかりと見つめながら「平和の主」に従う祈りを深くいただいでいきましょう。